

イスラーム復興の時代——激動の中東をめぐる旅から

小杉 泰 京都大学教授

イスラーム復興の始まり

今では「イスラーム地域研究」という言葉もすっかり定着し、違和感もなくなってきたが、一五年前にこの用語が初めて登場したときは、そのコンセプトについて多くの質問が寄せられた。「イスラーム世界」にしても、国際関係の中における実在であることは今や疑いもないが、かつては歴史的な用語として、つまり近代の国民国家の時代には消滅したものとして、理解されていた。

イスラームを共通項とする地域や社会が強く認識されるようになったのは、一九七〇年代から始まったイスラーム復興の顕在化に最大の理由がある。もちろん、復興の現象は一朝一夕に現れるわけではなく、その前には草の根レベルでのさまざまなイスラーム復興運動の活動があった。いずれにしても、現代社会にイスラームを再興するという運動がなされ、それがある程度実を結んだ結果として、「イスラーム復興」と総称される諸現象が顕在化した。筆者は四〇年にわたって、いろいろな地域や国々を訪れ、アラブ・非アラブのイスラーム圏を観察してきた。

当初はどれだけ広範な現象かわからず、

持続性があるかどうかも確信でなかったのが、八〇年代以降にはイスラーム世界のほとんどの地域でイスラーム復興が目につくようになった。九〇年代には「イスラーム世界」に共通の現象として確信できるものとなり、二〇〇一年の九・一一事件以降は、「テロ」問題とも関連して、イスラーム復興は国際関係の一面を規定するほど大きな影響力を持つようになった。

急進派や過激派が目を惹く一方で、近年では「イスラームの日常化」と呼ぶべき状態も見えている。イスラーム復興はいつまでも続くわけではない。「復興」やそれに先立つ「覚醒」という概念は、前提として「衰退」「停滞」「昏酔」などを前提とする。そこからよみがえるのが復興であり、果てしなく復興すると考える方がおかしいであろう。二〇世紀初めに「ウンマの復興」を唱えたカワキビー（一九〇二年没）は、「ウンマ（イスラーム共同体）の病弊とその治療」を論じたが、その比喩にならって言えば、病気からの快復が復興であり、いつまでも回復し続けることがありえない以上、病気が治れば日常生活が戻ってくる。その意味でも、イスラーム世界の「日常」をも捕捉するためにイスラーム地域研究が



カイロでのマウリド（生誕祭）。各教団のテントが立てられ、その前を教団員たちが旗を振りながら練り歩く（1987年撮影）



街頭でおこなわれているスーフィー教団の称名の儀礼



スエズ運河沿いの破壊されたモスクの尖塔

活躍すべきと思う。

前置きが長くなってしまったが、このフォト・エッセイでは、筆者が眺めてきた「イスラーム復興の時代」というものを各地の情景とともに振り返ってみたい。実際の見聞やそこで考えたことをふりかえることにも意味があると期待してのことであるが、単なる年寄りの思い出話にならないければ幸いである。

アラブ民族主義の黄昏

四〇年前にアラビア語とアラブのことを学び始めた頃は、アラブ民族主義やアラブ独自の社会主義的な実験に関心が高い時代であった。特に、一九七三年に第四次中東戦争が起きると、アラブ産油国による石油戦略の発動があり、日本は石油ショックに見舞われ、戦後経済の高度成長がこれを機に止まってしまったから、「アラブ」のイメージが非常に強いインパクトを与えた。アラブ産油国は「アラブの大義」に理解を示さない国は友好国ではないと断じたが、それはパレスチナ問題への理解を指していた。当然のように、アラブ民族主義＝アラブの大義＝パレスチナ問題、というような相関が生じた。それが当時の日本社会の平均的な理解であったし、若い筆者もその程度の認識であった。

七五年にエジプトに行ってみると、すでにイスラーム復興へのシフトは生じていたのであるが、日本ではそのことはわからない。エジプトに住んでしばらくしてから、ある知人から、転換点は六七年だったと聞いた時はまさに「目から鱗」の思いであった。

その人物は、六七年戦争（第三次中東戦争）の当時、軍参謀本部に勤めていたという。この戦争で、エジプトはイスラエル軍の奇襲攻撃の前になすすべもなく、惨敗した。イスラエル側は短期の勝利を誇って「六日戦争」と呼び、アラブ側はほぞを噛みつつ「六月戦争」と呼ぶ。この敗戦で、ナセル大統領が呼号していたアラブ民族主

義の勢威は地に墜ちた。アラブを統一し、イスラエルを打ち破ってパレスチナを解放する、という夢は潰えた。しかも、シナイ半島が占領され、シナイ半島とアフリカ大陸の間に位置するスエズ運河は閉鎖された。エジプトの外貨収入にも大きな打撃であった。

参謀本部では、対イスラエル戦を再構築するためにどうするべきか、力を失った民族主義に代わって士気を鼓舞するのは何かを検討していたという。知人の言葉によると、その討議が、イスラームの大義に訴えるしかない、ジハード精神が鍵である、という結論に至ったその時、近くのモスクのスピーカーから、「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり!）」と礼拝の制限を知らせる声流れ出て、知人たちはみな雷に打たれたようになったという。

六七年の敗北から七三年の戦争まで、エジプト軍は徴兵した兵士たちを除隊させず、その数はどんどんふくれあがった。七三年に、兵士たちが雲霞の如くスエズ運河を渡岸して「勝利」を収めてから、はじめて除隊が始まった。筆者がカイロの地に降り立った七五年頃は、町中に兵士の姿があふれていた。実は皆が兵士とは限らず、除隊しても兵服を着ている青年もたくさんいたのであるが、その数があまりに多く、たとえば路面電車でスリにあっても、兵服を着ていると誰が見分けもつかず、手がでなかった。



庶民にとっては、マウリド（生誕祭）はお祭りの一つ。教団のテントを回ったり、周りをそぞろ歩きして楽しむ。夜を徹して、称名の儀礼と舞踊がおこなわれる。団員だけでなく、見物客も夜通し楽しむ



ティジャーニー教団のエジプト本部。中央のサングラスの人物が団長ハーフィズ・ティジャーニー（1978年没）で、神秘家としてのみならず、ハディース学の泰斗として尊敬を集めていた。「ハーフィズ」は10万以上のハディースを暗誦している専門家の称号

伝統の再活性化？

七〇年代後半のエジプトでは、イスラーム復興と関わる現象は二つ見られた。一つは、スーフィー教団の復興である。スーフィズムは「イスラーム神秘主義」と訳されることが多いが、シャイフ（教団長）を中心に団員たちが神の名を唱える「称名」などの儀礼を通して、精神的な修行をすることで知られている。しかも、人里離れた修行場に籠もるのではなく、町中のモスクや街頭でも儀礼をおこなうので、カイロで暮らしているといやでも目につく。

マウリド（生誕祭）も、教団が目に見える重要な機会である。マウリドの中でもっとも有名なのはムハンマドの預言者生誕祭である。マウリドが近づく、街頭にテント張りの出店が出て、砂糖菓子（ラクダ）を売るのが風物詩となっている。砂糖菓子には、女兒向けのお人形さんのものや、男児向けのラクダや船をかたどったものがある。砂糖そのものでできているので、値段が量り売りであるのが面白い。

スーフィー教団はマウリドの際には、旗や垂れ幕を掲げて教団毎の行進をおこなう、モスクの近隣にテントを立てて、そこで称名などの儀礼をおこなう。預言者生誕祭は全国的におこなわれるので、総体としての規模は大きい、どの地域でもおこなわれるので活動は分散している。それに対して、聖者たちの生誕祭は地域的に偏るので、局所的には非常に規模が大きくなる。カイロでは、旧市街の中心部にあるフサイン・モスクの生誕祭に、ほぼすべての教団



リファーイー教団のカラーは黒。エジプトでも最大級の教団の一つで、20世紀前半には王家とも結びつきが深く、その縁でリファーイー・モスクには、イラン革命で国を追われたパフラヴィー国王も埋葬されている



赤は、バイユーミー教団のカラー。行進するバイユーミー教団の団員たち。教団カラーの赤いたすきに、金文字で「アッラーのほかに神なし・ムハンマドはアッラーの使徒なり」と書いてある。その下の剣の模様は、心の悪と戦う「大ジハード」を象徴している



ハーミディー・シャーズィリー教団の行進——フサイン・モスクに向かって、教団毎に色とりどりの横断幕や旗を掲げて行進する。この教団はギルセナンの研究によって、有名となった



預言者生誕祭が近づくと、街頭に砂糖菓子屋が出現する

が行進やテントでの儀礼をおこなう。壮麗なテント村が出現し、明かりを煌々とつけて、夜通しの儀礼がおこなわれる。

フサインは、カルバラの悲劇（六八〇年）で殉教したムハンマドの孫である。フサイン・モスクには、後になってここに密かに運ばれてきたフサインの首級が埋葬されているという。それが史実かどうか議論はあるが、教団の人びとは誰もが史実説をとっているように思われる。

行進をする時は、二キロほど先の出発点から教団毎に列を組んで、フサイン・モスクまでやってくる。今日でも、その光景は続いている。フサイン・モスクの前では、スーフィー教団最高評議会の議長、預言者



エジプトの預言者生誕祭の風物詩である砂糖菓子——お人形は女の子用、船の形は男の子用。砂糖そのものでできているので、量り売りをする

ムハンマドの子孫たちの代表（称号は、ナキーブ・アル・アシユラーフ）などが出迎え、各教団からの挨拶を受ける。

テントでおこなわれる「称名」の儀礼は、教団によっては非常にダイナミックである。神の名をとえながら、列をなす男性たちが左右に激しく体を振る姿は一種の舞踊であろう。ある教団の指導者に聞くと、動きは右から左へ、すなわち心臓のある左側が内奥・真髄、右側が外面を象徴し、左右の動きは外面から真髄へ向かう動



エジプトでも大手のハルワティー教団の支教団であるシュブラーウィー教団の行進

きを象徴しているのだという。教団によって流儀が異なるにしても、スーフィー教団は象徴的な言語によってイスラームを語る。

エジプトでは、都市部でも農村部でも多くの教団があり、各地に聖者たちの生誕祭がある。「エジプトではスーフィー教団が盛ん」という見方は、どの時代にも当てはまるようであるが、さまざまな研究を総合してみると、七〇年代に筆者が出会ったのは六〇年代後半から起きた再活性化の姿で



フサイン・モスクでは、宗教界のリーダーたちが各教団を出迎える



教団名を書いた緑の横断幕を並べて、フサイン・モスク前に到着したサアディー教団とブルハーミー教団の面々

あったと考えられる。

ところが、七〇年代後半には、政治・社会面でのイスラーム復興も急速に姿を現すようになった。

筆者が「イスラーム復興運動」と呼んでいるのは、こちらである。

スーフィー教団の隆盛をイスラーム復興の一部と見るべきかどうかは、議論が分かれる。イスラーム復興運動は、通常は、伝統的なイスラームのアンチテーゼとして生まれる。スーフィー教団は一九世紀まではイスラーム世界の主流であったから、それが再び隆盛しても、伝統の衰退に対応して新しいイスラームが生まれたことにはならない。

ぐってよく議論をした。結論を言えばスーフィー教団の隆盛は「伝統の活性化」としてとらえる方がよい。その上で、イスラーム復興運動とは異なるものとして、これを広義のイスラーム復興に含めるのが適切と思われる。

学生たちのイスラーム集団

教団は、木曜日の夜（イスラーム暦では日没から一日が始まるので「金曜の夜」と呼ぶ）や金曜日の午後に、それぞれの集會場所に集まり、独自の称名などをおこなう。外部にも見えるようなところで集合しているとは壮観であるが、政治性や社会性はない。たとえば、当時の国会議長（サイイド・マルイー氏、在職一九七四～七八年）がジャアファリー教団の団長の許に通っていることはよく知られていたが、政治的な意味はなかった。日本風に考えれば、政治家が禅の導師の許に通うようなことであろう。

それに対して、イスラーム集団の広がりともスリム同胞団の復活は、政治的・社会的な意味が強かった。いわゆるイスラーム復興としては、こちらが大きな意味を持っている。

イスラーム集団は、もともと大学のキャンパスで生まれた学生組織である。七〇年代のイデオログは、六〇年代には民族主義者であった人が少なくない。エジプト全体に起きた民族主義からイスラーム復興への流れと同様の現象であろう。

イスラーム集団は単一の全国組織でなく、各大学にイスラーム集団が結成され、



イスラームでは、結婚を推奨している。70年代の新郎新婦は、モダンなスタイルが多かった（右）。90年代になると、イスラーム風のウェディング・ドレスも登場した（左）

それが連合となった。総称として用いられるが、カイロ、アレキサンドリア、上エジプトのアスユートなどでは、人的ネットワークも思想的な傾向も微妙に異なっている。共通項は、イスラームへと回帰し始めたエジプトにおいて、学生たちのイスラーム



作家のマフーズ氏(右)、小田実氏(左)、筆者(中央)

『ダアワ』誌復刊第2号(1976年8月)の表紙。かつてナセル政権の弾圧に斃れた指導者アブドゥルカーディル・アウダの特集が掲載されている



ム意識が一つの運動として結実していた点である。

これと並行するように、ムスリム同胞団の復活があった。同胞団はナセル政権と対立したため、五〇年代後半から政府に弾圧され、六〇年代にはエジプト社会からほぼ姿を消していた。七〇年にサーダート政権が成立すると、獄中にあった団員が次々と釈放され、次第に復活を遂げた。サーダート大統領が同胞団を復活させたり、大学でのイスラーム集団を容認したのは、左派や民族主義者が彼の主たる政敵であったことと深く結びついている。

同胞団は、その機関誌『ダアワ(呼びかけ)』を七六年に復刊した。イスラーム的な記事を載せる雑誌がなかったため、イスラームに関心を持つ読者層の渴望を癒したのであろう、飛ぶように売れ、この雑誌をむさぼり読む大学生も目についた。青年層のイスラーム回帰という観点から見ると、組織としてはイスラーム集団、メディアとしては『ダアワ』が重要であった。

実のところ、この頃の筆者の関心はまだ民族主義やパレスチナ問題にあり、専門として志していたのもアラブ文学、特に小説であった。社会派作家のユースフ・イドリス(一九九一年没)や、後にノーベル文学賞を受賞したナギーブ・マフフーズ(二〇〇六年没)の作品を翻訳したり、紹介したりしていた。イドリス氏に会ったときに、しきりと日本訪問の際の話をしていったのが記憶に残っている。マフフーズ氏とは、作家の小田実氏が来訪した際に会う

機会を得た。彼の作品を愛読していて、カイロ旧市街を題とした『ミダック横丁』を日本に紹介したいと言うと、嬉しそうにしてくれたのが懐かしい。

しかし、イドリスの政治小説よりも、現実の政治の方が面白くなり始めていた。転機となったのは、思えば、一九七七年一月の物価暴動であったかもしれない。エジプトでは、長らくパンの価格が政府の助成によって安く抑えられていた。それが値上がりするという政府発表に怒った人びとが、国会などに押し寄せ、暴動に発展した。

その日、所用があつて国会からほど遠くないあたりに出かけていた筆者は、異様な人混みに驚いたが、日中はそれほど危険は感じなかった。夕方帰宅しようとする頃には、町中が殺気立ち、通りを行く自動車にも投石がなされる状態となっていた。筆者の乗ったタクシードも投石の嵐に遭い、石が次々と車の屋根にあたって激しい音を立てた。青ざめた運転手が必死に運転して脱出したことを思い出す。暴動はカイロ中に広がり、戒厳令が敷かれると、翌朝には主要な街角のすべてに戦車が配置されていた。

後の研究では、この暴動に際してイスラーム急進派が伸張したとされている。いずれにしても、一九五二年の共和革命以来の大規模な暴動で、エジプトにとっても中東政治にとっても大きな転換点となった。サーダート大統領はこの年の秋、エルサレムを訪問し、イスラエル国会で演説をおこない、和平イニシアチブを開始した。それ

が今日に続く中東和平プロセスの始まりであつたが、それに反対する勢力も増えた。

エジプト政府は、アラブの団結を前提に先頭に立つて戦う路線から、「エジプト第一」主義に転換した。エジプト人の知人たちも、しきりに「アラブの中で大義のために一番たくさん血を流したのはエジプト人だ。それなのに、アラブの同胞たちが何をしてくれたのか」と論じていたのを思い出す。「昨日は戦争、今日は平和、明日は繁栄」という政府の広報的な標語も使われた。

しかし、大義を捨てまいとする人びともいた。ただし、民族主義者としてではなく、新たなイスラーム的な主張によってである。しかも、その中には武力の行使をいとわない青年たちもいた。イスラエルとの単独和平を結んだサーダート大統領は一九八一年一〇月に、七三年戦争を称揚する戦勝記念日の軍事パレード中に、パレード隊の中にひそんでいたジハード団の凶弾で倒れることになった。

イラン革命の衝撃

時間的に少し戻るが、エジプトでイスラーム集団やムスリム同胞団が活発になり始めていた頃、東のイランで大動乱が始まった。七八年一月に始まった反王政運動である。後に、この運動は「イラン・イスラーム革命」として結実するが、始まった時はどこへ向かうのか誰にもわかっていなかった。七八年の夏には、アメリカの中央情報局（CIA）も、まもなく運動は沈静

化するという楽観的な予測をしていた。

非武装のデモ隊は、警察や軍隊による血の弾圧にもくじけることなく、街頭に繰り出した。犠牲者が出ると、それを悼むデモがおこなわれ、さらに犠牲者が出る、というサイクルがくりかえされた。筆者も、カイロでそのニュースを夢中で追っていた。世界的な事件が起きていることは、はっきりとわかった。

七八年も後半になると、パリに滞在している高位の法学者ホメイニー師が指揮をとっていることが知られるようになった。不義の王政と戦うことは信徒の義務であり、その道に倒れることは殉教であるとい

う、それまでにない革命イデオロギーが姿を現した。七九年に入ると王政が生き延びる可能性はなくなり、国王の出国後、ホメイニー師が特別機で凱旋帰国した。高齢のイスラーム法学者が革命指導者として登場したことに、国際的な驚きと困惑が広がった。ホメイニー師の黒いターバンはムハンマドの子孫であることを意味するが、そのような人物が現代の革命のイデオログであるとは、いったいどのようなことなのであろうか。新しい説明が求められた。

ところで、イラン革命を予見できなかったことをもってイラン専門家の不明を批判する見方がある。似たようなことで、冷戦



シーア派のアルバイーンの儀礼。若者たちは鉄鎖で我が身を打って、第3代イマーム・フサインの殉教を悼む。鎖を持っていない人は、手で胸を打つ。イランでは、革命のエネルギーと宗教的信条が合体するようになった



ザイナブ廟で、イラクのサッダーム・フサイン政権に命を奪われたサドル家の2人の「殉教者」のバッチが売られていた。2人とも、シーア派の法学権威として、信徒の指導と社会改革に尽くしたと評価されている（2007年撮影）



ザイナブ廟には、錠前がいくつも掛けられている。「殉教作戦」に従事する兵士たちが、楽園の扉を開けてもらうことを祈願して付けていく。この錠前を開ける鍵を首からさげて、自爆攻撃にでかけるのだという



ダマスカス郊外のザイナブ廟——シーア派初代イマーム・アリー（アリーの娘として、不義と闘う勇敢な女性として、今日でも信徒の敬愛を集めている。イラン的な建築様式と黄金のドームが、ひときわ目を惹く

の終焉に際しても、それを予見できなかった国際政治学者を批判する声があった。このような見方は、政治についても予測できるべきという考え方に基づいている。それができてこそ精密な科学と言える、という考え方である。経済学はそれをめざしてきて、政治学もその後を追う面があったが、筆者はそれに与しない。

革命にしても戦争にしても数が少なく、それぞれに固有の特徴があり、それらの事例から未来を簡単に予測することはできない。できないし、しようとするべきものでもないと思う。政治研究においてなすべきことは、実際に起きた革命や戦争などの現象を適確に分析し、説明することであろう。ところが、イランでの革命では、予測ができなかっただけではなく、何が起きたのか、「イスラーム革命」とはいったい何か、ということが事後にも容易に説明できなかった。

理由は単純で、それまでの研究上のパラダイムと関心が、民族主義や近代化などに偏っていたからである。近代化には世俗化が随伴するのが通例であり、宗教は近代化と共に衰えるか、少なくとも個人の内面に特化して社会性を次第に失う、ということが前提とされていた。今日から見れば、イスラーム復興もそれ以外の宗教復興も二〇世紀後半の歴史的事実となっているから、当時の前提はかえっておかしなものに見えるかもしれない。

筆者がイランを初めて訪れる機会を得たのは、革命後の八一年で、まだ革命の熱気

冷めやらぬ頃であった。それまで訪問、滞在していたのはエジプト、マグリブ諸国、トルコ、東南アジアのイスラーム地域（マレーシア、タイ、南部フィリピンなど）であった。別な言い方をすれば、スンナ派イスラームの諸地域である。シーア派（一二イマーム派）が主流の国であり、イスラーム革命の震源地を訪れることは、刺激的な



金曜礼拝の際に、両手を掲げて祈りを捧げる信徒たち。イスラームでは、学派にかかわらず、祈りの際に両手で天からの恵みを受け取る仕草をする（テヘラン大学）



テヘラン大学での金曜礼拝——導師を務めるラフサンジャーニー師の説教を聞く信徒たち。革命後のイランでは、金曜礼拝が重視されるようになった



サドルの弟子の一人、イラク・イスラーム革命最高評議会議長のハキーム師に、サドル思想について質問をする（テヘラン、1991年）



三留氏の写真集 243 頁——イラン・イラク戦争の前線で、不発弾を眺める筆者



レバノンやイランの戦争を描いた三留理男氏の写真集

体験となった。

テヘランでは、アルバイーン（四〇日目の追悼）の儀礼に出会った。エジプトで生誕祭を祝うフサインは、同じ人物とはいえ、シーア派では第三代イマーム・フサインにあたる。カルバラーの地での殉教を悼む行事は、殉教の日にもおこなわれるが、四〇日目の追悼にあたるアルバイーンも盛んである。大きな広場を埋めた一〇万人以上の人が、「おお、フサインよ！」と声を合わせて手の平で胸を打つ姿は壮観であった。右手を左の胸に打ち付けるだけに、皆の動作がびったり揃って、その音が共振して広場の空気を振るわせた。

歴史上のフサインは当時のウマイヤ朝の不義と戦うために立ち上がったが、支持者のいるクーファに向かう途中、カルバラー（現イラク南部）の地でウマイヤ朝軍に倒された。迎えに行かなかった支持者たちが痛恨を込めて自らを責め、フサインの殉教を悼む姿勢が、現代のテヘランで胸を打つ儀礼の形となっている。それは、ある歴史認識を現代人が自らのものとして取り込み、それを具体的な儀礼を通じて身体化し、思想化している姿でもあった。思想史に関心を持つ者にとって、これはこの上なく興味深いことであろう。

シーア派の起源は歴史として語られることが多いが、現代から見れば、それは歴史認識である。しかし、その歴史認識は「不義と闘うための蜂起」として、現代イランの革命運動では実践の象徴となった。革命の主要なイデオログであったアリー・

シャリーアティー（一九七七年没）は、戦って殉教するフサインの道か、生き残って不義を告発し続ける（フサインの妹）ザイナブの道のどちらを選ぶか、という形で青年たちに闘いへの参加を問うた。ちなみにザイナブの墓廟は、ウマイヤ朝の首都であったダマスカスの郊外にあり、今日も参詣者を集めている。

テヘラン大学でおこなわれている金曜礼拝を見る機会があった。シーア派はかつて金曜の集合礼拝をそれほど重んじないとされてきたが、革命によって金曜礼拝の位置づけが変わったという。大衆動員の観点から説教と集合礼拝を重視するようになったのは、十分領けることであった。その日はラフサンジャーニー国会議長（当時）が金曜の説教をおこない、フサインの殉教について語ると、参列者たちが激しく涙を流していた。フサインの悲劇を聞くと涙が出るというのは、心の問題のように見えるが、涙を流すことが規範化していると、自ずと身体技法として取り込まれる。

このことは、後にアラブ・シーア派の研究をするようになってますます痛感した。情感を放出しようと待ち構えている信徒たちに、その心情を吐露せしめるような説教の技術、語りの作法が、優れた説教師となる条件である。これは、スンナ派ではあまり見られない。この技術と作法は政治運動の動員の技術として、シーア派系の政治組織では非常に大きな役割を果たしている。

象徴言語の用法として、イランで目についたのは、外敵と内なる敵としての偽善者



ベイルート南郊は、レバノン南部から流入したシーア派住民地区となっている。アマルとヒズブッラーは、この地区を拠点として勢力を伸ばした。ヒズブッラーのナスルッラー書記長の肖像画が、このあたりがヒズブッラーの地盤であることを物語っている

(ムナーフィキーン)であった。当時は、イラク軍の侵攻によって始まったイラン・イラク戦争が進行中で、高性能の兵器を有する外敵がイランを圧迫する一方、国内ではモジャヘデーネ・ハルク(人民聖戦隊)がホメイニー指導下の革命政権に反対して、爆弾攻撃などを敢行していた。これはシャリーアティーの影響などを受けた革

命組織で、時に「イスラーム・マルクス主義」などと言われていた。イスラーム近代主義を継承する革命的左派と位置づけることも可能であろう。王政が倒れるまでは、ホメイニー支持派と共闘していたが、ホメイニー体制が法学者の監督権を軸としたイスラーム共和制を構築すると、反体制派にまわった。イスラームでは「偽善者」とは、もともとムハンマド時代の用語で、ムハンマドに腹背していたムスリムを指す。当時はマッカ勢との戦争状態であったから、現代のイランでもイラクとの戦争が続く中で、国内での武装反体制派を「偽善者」として、その構図になぞらえて指弾したのである。

後に、パリに亡命している同組織のラジャヴィー議長やその支持者にインタビューする機会を得た。彼らなりの独自のイスラーム解釈があることは理解できた。ただ、隣国との戦争中に国内で武装闘争をすることが人びとの支持を得る路線として正しいかどうか、大いに問題であろうと感じた。イラン・イラク戦争は大きな犠牲を生んだが、イスラーム共和制が内外の「敵」との戦いによって基盤を強めた面は否定できない。

イラクとの戦争の前線を訪れる機会も得た。テヘランから西南方に飛び、フーズスターン地方のアフワーズ市に降り立ち、戦場まで行った。旅客機は飛んでいないので、輸送機に便乗する。前線では、気がつくとも両軍の間の地域に入っていたこともあった。

レバノン戦争という転換点

国家同士の正規戦ではなく、国家(イスラエル)と非正規軍が非対称的に戦う現場を経験したのは、一九八二年のレバノン戦争の時であった。「レバノン戦争」と呼ばれているのは、一九八二年六月にイスラエル軍がレバノンに侵攻し、南部を占領し、さらに首都ベイルートを包囲した戦争である。規模と性質から見て「第四次中東戦争」と呼ぶべきと主張する研究者もいる。アラブ・イスラエル戦争で首都が包囲されたのは、空前絶後の事態であった。

戦争そのものを論じると長くなるので、簡略に言えば、レバノン南部に基地を置いてイスラエル側に越境攻撃をしていたPLO(パレスチナ解放機構)とそのゲリラ部隊を掃討するために、イスラエル軍が侵攻したものである。ゲリラ軍は簡単に南部から駆逐され、首都のベイルートで包囲戦に耐えたが、結局は海路、アラブ各地に向かって撤退し、イスラエル軍の最初の目的は達成された。

この戦争が重要なのは、レバノンにおいても、これが民族主義からイスラーム復興への転換点となったことによる。レバノンでは、七五年から九〇年まで内戦が続いた。五八年の第一次内戦に対して第二次内戦と呼ぶが、規模も期間も桁違いであるため、近年はレバノン内戦と言えば第二次を指す。足かけ一六年に及ぶ内戦の中で、イスラエル軍が侵攻したレバノン戦争は、その一幕ともなっている。

七五年から八二年までは、パレスチナ・



ベイルートの街角に貼られたアマルのポスター——創設者ムーサー・サドルは1978年にリビア訪問中に行方知れずとなったが、メンバーたちはサドルを精神的指導者として敬愛し続けた

ゲリラとレバノン左派およびアラブ民族主義者が連合して、レバノン右派と呼ばれる勢力と戦っていた。たとえば、著名な民族主義の民兵組織として、独立ナセル主義者組織のムラービトウーン軍がある。エジプトのナセル大統領を指導者とするナセル主義は、エジプトではナセル没後に急速に衰えた。前述したように六七年戦争に敗北したことも一因であるし、七〇年に後継者となったサーダート大統領が強力に脱ナセル化を進めた。しかし、エジプト以外では、ナセル主義はそれなりに勢力を保ち、レバノンでも八〇年代まで内戦の主要なアクターの一つであった。

西ベイルートでも、道路脇の壁に「ナセル主義は我らを導く光、敵を撃つ炎」というスローガンが書かれていた。脱ナセル化



ヒズブラーの精神的指導者ムハンマド・フサイン・ファドルッラー師と筆者（ベイルート、1995年）

以後のエジプトから来て、それを見ると大きな「時差」を感じた。

ベイルートは東西に分かれており、西半分は政府機能や商業地区が集中している。西半分は住民がムスリムで、東半分はキリスト教地区である。パレスチナ・ゲリラとレバノン左派は、西側に拠点をもっていたため、イスラエル軍はこれを包囲した。東西ベイルートの境界は封鎖され、国連関係の車両しか出入はできなかった。この時は、ユニセフの仕事をする写真家・三留理男氏に同行しており、ユニセフ事務所の計

らいで三留氏と共に西ベイルートに入った。

包囲された都市の中は、戦乱の危機と緊張感で空気が張り詰めていた。時折、イスラエル空軍機が町中に爆弾を落とすため、どこにいても危険があった。店に並ぶ食品も少なく、ツナ缶とトマトが手に入ればご馳走であった。夜は、包囲軍の攻撃はなかったが、抵抗軍の車両が景気づけに機銃を空に向けて掃射しながら走るのが恐かった。窓やベランダのガラスが割れて、怪我をしかねないからである。そのため、夜はベランダから身を遠ざけて、キッチンのカウンターの裏で睡眠を取った。

ゲリラ軍は、イスラエル軍が西ベイルートに侵攻する場合に備えて、都市ゲリラ戦で迎え撃とうとしていたと言われていた。強力な戦車隊はレバノン南部でゲリラ部隊を駆逐したが、都会の中では戦車は障害物で道をふさがれると動きが取れなくなり、意外と脆いという。結局、イスラエル軍の進攻はないままに、PLOの武装部隊の海路撤退に至った。

占領下の南部では、シーア派系の組織であるアマルの学校などを訪れる機会を得た。アマルは、もともとは「奪われた者たちの運動」という組織の武装部隊で、「レバノン抵抗軍団」という勇ましい名前が正式名称であった。その頭文字をとると「アマル」になるが、これは「希望」の意味になるので、今日では組織全体もアマルと呼ばれている。

アマルは、六〇年代のシーア派のイス



ガザ地区——壁に「ハマースは前進する」と書かれている。インティファダ（民衆蜂起）では、壁にスローガンを書くことがメッセージ発信の主要な方法の一つとなった。残念ながら、その時々各組織のスローガンを記録したものは少ない

ラーム覚醒の結果、生まれた。ただ、この頃はイスラーム復興の初期で、どちらかと言えばシーア派意識を強調する社会的な地位向上をめざすものであった。レバノンも政治的な「宗派制度」を取っており、公職を出身宗派に割り当てるため、宗教・宗派が利権集団化する構造を持っていた。その中で、シーア派は人口に比して、限定的な利権しか得られず、社会的な不満が鬱積していた。そのため、六〇年代まではシーア派出身者は、社会主義などの世俗的な革命

や変革の組織に加わるのが通例であった。当然であるが、社会主義者や世俗的な革命家はシーア派出身者であっても、シーア派意識で行動しているわけではない。アマルの登場は、シーア派的なアイデンティティに基づく改革運動としてのオルタナティヴを提供した。

彼らは、パレスチナ・ゲリラが南部で我が物顔をしているのを不快に思っていたが、イスラエル軍が、ゲリラを駆逐する自分たちをシーア派住民が歓迎してくれると考えたのは、勘違いであった。住民たちは、自分たちの土地と暮らしを守ろうとした。アマルも反占領に傾くが、もっとイスラーム色の強いゲリラ組織が登場した。ヒズブッラー（神の党）である。

筆者はレバノン戦争の現場に出かけて、レバノン南部がシーア派の故地であることと、今日でもシーア派運動の拠点であることを知って、アラブ・シーア派に強い関心を抱いた。シーア派というと、当時はイラン的なものというイメージが強かった。

レバノン戦争の翌年、駐留中の米海兵隊、フランス軍、さらにレバノン南部のイスラエル軍に対して、トラック爆弾攻撃がおこなわれた。その時はヒズブッラーと名乗らなかったが、イスラーム的な「弱者の武器」を理論化したレジスタンス運動の登場であった。欧米のメディアでは、もっぱらテロ組織という扱いであったが、わずかな数年の後に、国会議員団を擁するレバノン最大級の政治組織となると、誰も予測していなかった。

草の根レベルでの福祉活動や教育活動も熱心に展開したし、独自のラジオ、テレビ放送などの媒体も持つようになった。九〇年代の現地調査の際には、これらの放送局も訪問した。面白いことに、スタジオや事務所はいずれも地下にある。長い内戦のため、日常活動の基盤も防空壕仕様ということであろうか。ベイルートの出版社も印刷所は、内戦中は多くが地階で仕事をしていたと聞いた。内戦の間もベイルートの出版が途絶えないのが不思議だったが、その疑問の一端が解けた。

ヒズブッラーの思想的指導者であったムハンマド・フサイン・ファドルッラー（二〇一〇年没）は、イラクのナジャフで学んだシーア派ウラマーで、イラクが生んだ独創的思想家ムハンマド・バークル・サドル（一九八〇年没）が盟友であった。ちなみに、アマルを創設したムーサー・サドルは同じサドル家の従兄弟で、イランで育ちレバノンに移住した。サドル家のもととレバノン南部の出身で、その後イラクへ移住し、さらに一族の一部がイランにも移住した。このように調べていくと、レバノン、イラク、イランを結ぶシーア派ネットワークが次第に明らかになっていった。

その調査は九〇年代にも続け、ファドルッラーにもいくどかインタビューをすることができた。広範なネットワークを考えると、シーア派の一部で誤解されているようにイラン的なものでも、イラン中心のものでもないことがわかる。

パレスチナのイスラーム復興

ふつうは、スンナ派とシーア派は仲が悪く、ということになっている。歴史認識などを見ると、確かに大きな違いがある。しかし、イスラーム復興は現代的な文脈で生じるため、起源や歴史と関わりの薄いことも、たくさんある。しかも、近代化と世俗化がどこでもそれなりに進んでいるから、たとえスンナ派やシーア派の「出身者」だとしても、個々人が何を信じているかは聞いてみないとわからない。

スンナ派とシーア派の垣根を取り払う一例が、「自爆攻撃」であろう。メディアは「自殺攻撃」とすることが多く、当人たちは「殉教作戦」と呼ぶことが多い。これを始めたのは、ヒズブッラーのトラック爆弾攻撃であった。それを理論的に正当化したのが、「弱者の武器」論である。これは、虐げられた者たちは自分は弱いと思いつているが、実際には数が多く、皆が変革のために決起すれば力を発揮できるという考え方である。ファドルッラーの著作や発言を見ると、理論構成はシーア派的な色が非常に強い。

しかし、その戦術が対イスラエル戦で奏功したため、パレスチナ人たちが非常に大きな影響を受けた。区分で言えば、パレスチナ人はいずれもスンナ派であるから、これは非常に珍しいケースである。

パレスチナのイスラーム復興は、八〇年頃まで目に見えない。ガザ地区にしても西岸地区にしても、歴史的にはムスリム同胞団がかなり強い地域であった。しかし、漸

進主義を取る同胞団は反イスラエル闘争を優先せず、パレスチナ人は多くがPLOを支持していた。七〇年代には、パレスチナ人の口から「同胞団はイスラエルと協力する反動である」という批判も聞かれたほどである。

筆者が八三年にパレスチナ／イスラエルを訪れた時は、まだインティファダ（民衆蜂起）もなく、パレスチナ人の政治的な支持はPLOに集中していた。とはいえ、前年のレバノン戦争での敗北（海路からの離散）によって、被占領地でもPLOの支持に陰りが見えていたかもしれない。現地では、青年たちのイスラーム・キャンプに出会った。エジプトでも、泊まり込みの学習会であるキャンプはよくおこなわれている。徐々にパレスチナでも、イスラーム復興の兆しが見えているという印象を持った。

後で考えると、彼らは同胞団の青年部で、やがてハマースに発展する部分だったように思われる。同胞団は八七年になるとついに、闘争組織である「ハマース（イスラーム抵抗運動）」を創設し、「少年たちが石つぶてで占領軍と戦う」民衆蜂起で大きな役割を果たすようになった。

八〇年頃に生まれたもう一つの闘争組織が「パレスチナ・イスラーム・ジハード運動」である。これは同胞団と違い、草の根の福祉運動の部分は持たない。もっぱら闘争のための組織である。創設者の一人ファトヒー・シカーキーは、彼らの運動が誕生したのは、一つはイラン革命の成功に鼓舞されたためと述べている。

ハマースもジハード運動も、九〇年代になると自爆攻撃を戦術に採用するようになった。前述のように、これはシーア派系のヒズブッラーの影響がスンナ派の組織に及んだ顕著な例となっている。

後年ガザ地区で、ムスリム同胞団の拠点「イスラーム総合センター」などを訪問した際に、草の根運動の実態を瞥見することができた。寡婦と孤児の支援、貧者向けのクリニック、保育所、スポーツ・クラブなどの経営は、同胞団が唱える総合的な社会のイスラーム化の考え方をよく示していた。センターの壁に同胞団のスローガンが書かれていたのが、しぶとく草の根の活動を続ける組織であるにもかかわらず、原則として宗教的な信条を強調し続ける姿を示していて、非常に印象的であった。スローガンは、「アッラーはわれらの目的、使徒「ムハンマド」はわれらの模範、クルアーンはわれらの憲法、ジハードはわれらの道、神のための死はわれらが本望」というものである。

イスラーム銀行の広がり

もつといろいろと書くこう思っていたが、ほぼ紙幅が尽きてしまった。非日常的な経験のエピソードが多かったが、あらためてイスラーム復興が時代の激動の中で動いてきたことを思う。

イスラーム復興の観点からは、一見すると動きがなく、じわじわと広がるイスラーム復興も重要である。その代表例として経済面での復興、すなわちイスラーム銀行の



1975年設立のドバイ・イスラーム銀行は、商業的なイスラーム金融の先駆けとなった。現在も、各地で活発な営業を続けている（シャルジャ酋長国支店。2007年撮影。外観と店内）



設立と広がりをおこなうことができる。六〇年代の先駆的な試みの後、初めて商業的なイスラーム銀行が誕生したのは、七五年のドバイ・イスラーム銀行であった。折りからエジプトも、アラブ社会主義から門戸開放経済政策に転換しているところであり、七七年にはエジプト・ファイサル・イスラーム銀行が開設された。これは、サウディアラビアの故ファイサル国王（一九七五年没）の息子ムハンマド王子が経営するイスラーム銀行グループの一つであった。カイロの中心部にナイル川に面して、それまで一党独裁が続いていたアラブ社会主義連合の本部ビルがあった。これが、複数政党制導入によって解体され、できたファイサル銀行の本店となった（後に新ビルを建てて移転）。アラブ社会主義からイスラーム銀行への変貌は、時代の変化を雄弁に物語る風景のように思えた。

八〇年代には、今ではイスラーム復興と総称される一連の現象をどのように名付けるべきか、欧米でも日本でも議論が起きた。欧米での論議の一つの帰結が「イスラーム原理主義」であることは論を待たない。日本では、一九八五年の日本中東学会第一回大会のメイン・パネルが「イスラーム復興運動」と題しておこなわれた。イスラーム復興やイスラーム復興運動という呼び名のよさは、政治に限らず、イスラーム銀行や草の根の福祉活動などを広くとらえられることである。「原理主義」を使うとどうしても政治、特に過激派や武装闘争、紛争に目が向きがちであることを考える

と、日本で確立された視点には大きな利点がある。

パネルでは、最後にフロアから「今後、イスラーム復興運動はどうなると予想するか」という問いが投げかけられ、基調報告をおこなった筆者を含めて全員が、まだまだ展開が続くのではないかと回答をした。とはいえ、その当時、ここまでイスラーム復興が広がると確信していたわけではない。回答の大半は、新しい時代のうねりがある以上そう簡単には潮は引かないであろう、という趣旨であったように記憶している。

政治面は言うに及ばず、イスラーム銀行にしても、その後大きく発展した。シティバンクやミズル銀行のような一般の銀行までが、無利子を好む顧客を得ようとイスラーム金融部門（イスラミック・ウィンドウと呼ばれる）を開設するようになった。狭義の銀行だけではなく、保険や証券などにも広がって、イスラーム金融機関と総称されるようになった。今日では、そのような機関が五五カ国に六六〇以上活動している（二〇一一年現在）。

二〇一一年のアラブ民主化革命でも、イスラーム政党は独裁体制が倒された各国で躍進している。これをイスラーム復興の進展を物語るものと解するのか、むしろイスラームの日常化によって、さまざまなイスラーム政党が多様なイスラームを唱える時代となったと見るべきなのか、そのあたりも含めて私たちのイスラーム地域研究の考究は続いていく。